

オオナムチとスクナヒコの国作りの旅

むかし。

オオナムチの命みことが出雲いずもの国うみべの海辺を歩いていました。やがて、おなががすいたので、オオナムチは、砂浜こしに腰を下ろして、お弁当をひろげました。そのとき、海の向こうから、小さな声が聞こえました。オオナムチはふしぎに思つて、手をかざして眺めましたが、何も見えません。

しばらくすると、海のかなたから、小さな船が近づいてきました。船は、カガミという草あで編んであつて、船の中に、小さな男の神さまが座っていました。神さまは、ミノサザイの羽あでできた服を着ていました。船は、波のまにまに近づいてきて浜に乗り上げました。

オオナムチは、

「これはこれは、小さな神さまだ」といつて、その神さまを船からつまみあげて、てのひらに乗せました。神さまは、ぴよんと飛び上がつて、オオナムチのほつぺたにかみつきました。オオナムチは、びつくりして、

「おまえは、なんという名前の神さまなんだ」とききました。けれども、神さまは、笑わらつて答えません。

オオナムチは、周りにいる神さまたちに、

「だれか、こいつを知っているかい」とたずねました。みんな、

「知らないなあ」といいます。すると、かえるの神さまが、

「かかしなら、きつと知っていると思ひますよ」といいました。かかしは、一本足なので、歩けないのですが、世の中のことは何でも知っている神さまなのです。オオナムチは、かかしのところに行つて、たずねました。

「おまえ、こいつを知っているかい」

かかしは、

「ああ、高天原たかまがはらのカミムスビの命むすこの息子ですよ」と教えてくれました。そこで、オオナムチは、高天原に使いを出してたずねました。

カミムスビの命は、

「わたしは、千五百柱はしらの神を生んだのだけれど、そういえば、そのなかに、いたずら者で、いうことを聞かない小さな神がいましたね。あの子はわたしの指のあいだからすべり落ちただけで、きつとその子にちがいない。スクナヒコの命というのです」と教えてくれました。そして、

「オオナムチはスクナヒコと力を合わせ、心を合わせて、葦原あしはらの中なかつ国くにを作りなさい」といいます

た。

そこで、オオナムチは、スクナヒコといつしよに、国作りの旅に出ました。

オオナムチとスクナヒコは、旅をつづけているうちに、広い草原に出ました。草原のあちこちに小さな沼ぬまがありました。ふたりは、

「こは湿しめっていて、お米が育つのにちょうどいいぞ」といって、土をたがやして稲いねの種をまきました。そして、そこを「たね村」と名づけました。

たね村で稲がよく育つを見て、ふたりは安心して旅をつづけました。

ふたりは、早くいい国を作りたくて、とつとつと歩いて行きました。やがて大きな川のほとりに来ました。河原の砂に、とつとつと歩くふたりの足跡あしあとがつかまりました。スクナヒコはそれを見て、

「この川は、とど川つて名づけよう」といいました。

ふたりは、旅の途中とちゅう、あちこちで人間に会いました。人間たちは、すぐに病気になったりけがをしたりして、早くに死んでしまいます。ふたりは、それをあわれに思いました。そこで、箱根はこねという所まで来たとき、地面の下から温泉をほり出しました。温泉には薬の力があつて、病氣やけがをした人たちが温泉につかると、すぐに元気になりました。人間も動物たちも、よるころで温泉にやつて来ました。それからは、オオナムチとスクナヒコは、行く先々で温泉をほりました。あるとき、スクナヒコがいきました。

「ねえ、競争しよう。粘土ねんどを担かついで遠くまで歩くのと、うんこをしないで遠くまで歩くのと、どっちがいい」

オオナムチは、

「おれは、うんこをしないでいこう」といいました。そこで、スクナヒコは、

「じゃあ、ぼくは、粘土を担いでいこう」といって、小さな体で大きな粘土をかつぎました。

何日も歩いていくうちに、オオナムチが、

「おれはもうがまんできない」といって、座りこんでうんこをしました。スクナヒコは、笑って、

「ぼくも、もうだめだ」といって、粘土を投げ出しました。

そのころ粘土のことを「はに」といつたので、粘土を投げ出したところを、「はに岡」と名づけました。そして、オオナムチのうんこが、笹あさにはじき飛ばされて、着物のすそにくっついたので、そこを「はじかの村」と名づけました。そのときの粘土もうんこも、石になって今でもそこにあります。

はに岡に登つてあたりを見まわすと、遠くに稲を積んだような形の山が見えました。そこで、ふたりは、

「あの山に、稲の種を置いておこう」といつて、山の上に稲の種をどっさり置きました。そして、その山を稲種山と名づけました。

こうして、旅を続けて、道後という所まで来たとき、スクナヒコがけがをして動けなくなりました。スクナヒコが今にも死にそうになったので、オオナムチは、おどろいて、何とかしてスクナヒコを助けられないかと考えました。

「そうだ、温泉だ」

オオナムチは、別府の温泉に飛んで行って、道後まで地下道を作つて、お湯を引きました。そのお湯にスクナヒコをつけると、スクナヒコは、たちまち目を開けて、何事もなかったかのように、のんきにいました。

「ああ、よくねちやったなあ」

それから、温泉の中の石の上で飛び跳ねました。オオナムチは、おおよろこびしました。これが、道後温泉の始まりです。温泉の石にスクナヒコが飛び跳ねたときの足跡がついて、今でも残っています。

あるとき、オオナムチが、スクナヒコにききました。

「なあ、おれたちふたりで、がんばつて国をつくってきたが、うまくよい国ができただろうか」  
スクナヒコは、少し考えてから、ほほ笑んで答えました。

「そうだねえ。うまくいったところもあるし、うまくいかなかったところもある。そんなもんじゃないか」

やがて、ふたりは、出雲の国にもどつてきました。

ふたりは、畑に粟の種をまきました。粟はよく実つて穂が豊かにたれました。スクナヒコは、粟の穂にひよいと乗ったかと思うと、はじめられて、そのまま常世の国に飛んで行ってしまいました。そして、それつきり帰つて来ませんでした。

オオナムチは、

「まだ国作りは終わっていないのに。あとは、おれひとりでやれつていいのかい」といつて、泣きました。

スクナヒコが、粟の穂にはじかれたところを、粟島と呼んでいます。

村上郁再話

資料：日本古典文学大系『古事記』『日本書紀』『風土記』『岩波書店』